

山口謠司著 あゝ～教科書が教えない日本語～（中公新書ラクレ）

==五十音図への恨み==（別副題）

はじめに

私たちは、日本語で話している言葉を書き表すために「五十音図」を習います。この時の「日本語」は、「標準語」とされる「日本語」です。言文一致運動という五十音図を使った教育が始まったのは、明治時代初期、今から約150年前のことです。この教育によって、次第に我々は、日本にはない外国語の音や、方言で使われる音を「五十音図」に書かれる文字で、すべて表せると思うようになってしまいました。別の言い方をすれば、五十音図以外の音は、世界にはもちろん日本語の方言にも本当はたくさんあるのに、それを切り捨てて、何も思わなくなった。五十音図の仮名は、「あ」から「ん」の文字しかない。全ての音を正確に書き表すことができる文字ではない。書き表したつもりになっているだけの現象に過ぎない。

じつは、言語は日本語に限らずどのような言葉も、およそ100年を周期に変化をしている。明治大正時代の文学作品が、注釈や現代語訳なしには読めなくなっていることからわかる。ましては、1000年前の「源氏物語」や「枕草子」を柔軟に作者の意図を読み取ることはほとんど不可能。

<筆者のグチ>

「やうやう」「てふてふ」など、いわゆる旧仮名遣いと呼ばれるものを、なぜその時代の人たちはこのような表記をしていたのか。古典を教える先生で、なぜこうした表記で古典が書かれているのかという理由を、子供にも分かるように説明してくれる方に会ったことがない。

それは、現代語の「こんにちは」を「こんにちわ」と書いてはいけないという理由を正しく説明できないのも同じである。

この筆者は、五十音図に、とてもこだわりがあり、五十音図に何かいやな思い出を持っているのではないか、五十音図は、未熟不完全だから、ダメ出ししてやろうなんて気になっているように思える。

1章 あゝいゝうゝえゝおゝの誕生=濁音の誕生

赤塚不二夫の傑作「天才バカボン」から

バカという言葉の語源は、①梵語の moha または mahallaka の転で僧侶が隠語として

用いたこと、②馬と鹿の区別がつかないくらい能力が低いこと、などの節があるが、室町時代の書物に「バカにつける薬はない、バカほどこわいものはない」「バカのひとつ覚え」などと使われていることから、我々は500年ほど「バカ」という言葉を使っている。その「バカ」にのほほんとした感じがする「ボン」(ボンボン)をつけたので、語感、音感という点から言えば、より焦点が定まらない、漠然とした「ぼけた」感じが伝わる。

一方、「ごみ」「ばか」「ぶた」「ぼろ」といった濁点がついた言葉で始まる日本語は、不潔あるいは不快を感じるものが多い。お金・・・ぜに。逃げる・・・ずらかる。これは、国学者・本居宣長が発見したこと。一方、古事記、日本書紀には、濁点で始まる和語が一つもない。

怪獣の名前、ゴジラと戦った怪獣の名前のほとんどは、濁点が着いている。『キングギドラ』『ヘドラ』『ガバラ』など。ウルトラマンシリーズの敵も、濁点が少なくない。「ゴメス」「ナメゴン」「ガメロン」「バルタン星人」またこれらの戦うシーンでは「グワーン」「ドカーン」「ダダダダ」といったように、濁音の擬音語や擬態語が多く使われる。濁音は、日本語にとってどういう役割をするものだったのか。

ドイツに留学した森鷗外は、Vの発音を日本語に表すことに挑んだ。ヴィタ・セクスアリスのヴィの発音を書き表すため、1946年まで使われた教科書にあった「ワ、ヰ、エ、ヲ」を参考に、ヰタ・セクスアリスと書き表した。さらに、バイオリンなどのようにそれまで日本になかったものが外国から入ってくると、可能な限りオリジナルに近い形で表記発音する方法を選ぶため、五十音図にはない表記「ヴ」が生まれてくることになる。

(P. 38)

1660年代以降から中国語のツァツェツォを、1800年代の始めからオランダ語を書き表すために、さ○せ○そ○が使われていたことが分かっている。今となつては、ぱびぷぺぼしか残っていないが、リアルさを文字の上で書き表そうとした時に、「半濁点」をつけたり、濁点を利用するという方法があった。

(P. 40)

さらに、か○○という表記をしている。これは田舎のなまり言葉で、江戸っ子がいう「が」の濁音とは違うという。30年ほど前のNHKテレビやラジオのアナウンサーの放送を聞いてみよう。30年前の「が」は鼻濁音で、鼻から空気が抜けるような甘く柔らかい感じのする「んが」という発音である。か○○の発音は、固くてトゲのあるがの発音である。江戸ッこはみんな鼻濁音のんがで話をしてしたが、か○○が記録

されてから200年後の2000年を迎えた頃には、NHKのアナウンサーをはじめ、全国で、か〇〇（つまり固いトゲのあるが）が日本語の公用語となってしまった。

(P. 47 から「漱石と森鷗外の作風比較が出てくる、面白い内容だが、濁音とは直接関わらないので、略す。」一つだけ記すと、

「国語」と呼ばれる日本語に対する意識について考えてみたい。「舞姫」は2021年度までは、高校3年生で読む定番の教材であった。しかし2022年度からの新しい教科書「論理国語」の導入で、高校では文学を学ぶ機会が少なくなる。「文学」が国語から消えた原因の一つは、先生達が、明治時代の文豪の言葉を理解して生徒に伝えることができなくなったからです。「舞姫」を書いてからすでに130年以上が経過し、鷗外が使った言葉の感覚を享受できる限界を超えてしまった。また小説家・井上靖が「舞姫」の「現代語訳」を、筑摩書房から文庫本で出ている。現代語訳を読まないで、国語の先生でさえ読み解くことができない「古典」になってしまったということ。

マンガや劇画は、リアルさの表現が求められる。「あー」ではなく「あゝー」は言い表せない濁った叫びを表している。心の底から出る、軋むように、絞るような、毒々しい、叫びである。「ママはテンパリスト」の「うゝ わゝ あゝ あゝ あゝ あゝ」であったり、ONE PEACEの「仲間がいるゝよ!!!!」である。るゝは、流れ出す涙が鼻に打ち寄せてきている所を表現している。Dr スランプの「きゝ えゝ えゝ ～～っ!」は、あられちゃんのすごさに驚く則巻千兵衛の気持ちを表している。

五十音図は、母音と子音という言語学の基礎をも教え、外国語教育にも通じる非常に高度な工具です。100年に一度の革命期に突入している今、五十音図を発展させて考えるべき時を迎えているのではないか。たとえば「R」と「L」の区別発音ができないのであれば、らりるれろは「L」、ひっくり返しのらりるれろは、「R」として、五十音図にもう一行増やして「R」と「L」の発音の区別を教えるのはいかがでしょうか。

2章 学校が教えない「あいうえお」の秘密

我々日本人は、学校で「国語という教科を習います。なぜ「国語」を習わなくてはならないのでしょうか。大人になると、本を読んだり、自分で考えたり、人に相談することもできる。しかし子どもは、悩みや不安な気持ちを言葉にする力がまだ不足している。言葉にできない気持ちは混沌としてもやもやしている。「言葉」に出せれば楽になるはずなのに「言葉」にすることが難しい。言葉を覚えること、国語に強くなることとは、自分の言葉で、きちんと自分のなかのモヤモヤを人に分かるように伝える

る力を養うことである。また、言葉の持つ繊細さを教えることこそ、本当の「国語」教育なのだと思う。

一九四五年八月十五日を境に、日本は大きく変わる。日本語にも大きな変化が起こる。口語体平仮名文で書かれた「日本国憲法」の発布、文部省の国語審議会が作成した「現代かなづかい」「当用漢字」の使用が告示される。

- ①日本語の書き方が、いきなり大きく変わり「左から右」へ
- ②漢字の形が、見た目にスカスカ（晝食→昼食、獨立→独立、區→区、學→学）
- ③仮名づかい（はせお→ばしょう、けふ→きょう、してゐる→している）
（GHQ 日本語を使う緒を止めさせて英語を使わせよう、ひらがなだけ）
（志賀直哉 日本語を捨ててフランス語を国語にしてしまえばいい）

戦後作られた「当用漢字」（当分の間、用いる漢字）が名前を変えて「常用漢字」と呼ばれるようになった。常用漢字は、一般の社会生活において漢字の使用目安とされ、2136字となっている。「当用」のなかった戦前は、とても難しい漢字が使われていた（旧字体）。旧字体は、「繁体字」とも呼ばれる中国の清王朝、康熙帝の勅令によって編纂された「康熙字典」に基づく正式の漢字である。それを日本は独自に簡素化した。中国も独自に簡素化した（台湾は、まだ繁体字を使用している）。我が国では明治時代の欧化政策の中で、漢字が文明開化・近代化を阻むものだという意識が広がり、難しい漢字を覚えたりする時間をもっと他の勉強に使うことができれば、日本人はさらに偉大な発見、世界への貢献ができるに違いない」という、明治時代以来、福沢諭吉など多くの進歩主義者たちの主張が実現され、『当用』『常用』漢字が生まれた。

「てふてふ」表記の説明（P. 88）・・・私には難しい！（略）

ひらがなカタカナが発明された当時、濁音や半濁音を表すものはなかった。しかしそれ以前の万葉仮名では、清音と濁音の区別がはっきりととされている。例えば、「か」は、「加」、「が」は「画」が使われていた。発明された当時は、清音と濁音との違いに敏感だったら、濁音のひらがなカタカナが作られていたに違いないが、その時は濁音を嫌う日本人の意識が大きく働いたのではないかと考えられる。なので、あとから「濁音」や「半濁音」が開発された。なぜ濁音専用の仮名が作られなかったのかという問題については、「てんてん」（角川選書）に詳しく書いたので、参照を。

江戸っ子は、「ひ」と「し」の区別ができないってこと、聞いたことがありません

か。木場や門前中町の居酒屋で比較的高齢の方に「潮干狩りとかいった事は？」と聞いてみる。「てめえ、バカにしてんのか。＜ひよしがり＞はガキの頃にはいった事があるが、この年になってからはいかねえんだよ」と言われる。江戸っ子はくしおひがり＞と発音できなくて＜ひよしがり＞＜ひおしがり＞と言う。

「白くて広い」なども言えず「しろくてしろい」となってしまう。発音の変化はとても面白い。

カツオの「カツ」は、勝つではなく堅つからきた言葉である。ではカツオの「オ」は何だろうか。旧仮名遣いでは、カツヲと書く。それは、魚の訓読みであるウヲのヲである。「魚河岸」「太刀魚」「魚市」等を発音すると、「ウヲ」と発音していませんか。カツオも、発音をそのまま書くと、カツヲと言っています。旧仮名遣いだと発音と合致しているのに、新仮名遣いにしたため、勝つ音と表記が一致しなくなってしまったものもある。(チョウよりも、チョーの方が、より発音に正確ではないか)

「を」のルーツは、遠の草書体から生まれたひらがなである。「ヲ」は「乎」を略して作られた。目的を表す格助詞にしか「を」は使われない。「を」は絶対に必要な助詞ではない。「ごはん、食べる」といっても通じる。古典でも謡曲、浄瑠璃などでも、「を」は一拍おくだけであってもなくてもかまわない。

「遠」と「乎」の共通点は『大きな声』ということ。遠い所にいるひとを呼ぶのは『大きな声』が必要。「おーい」と呼ぶ。日本語の助詞「を(ヲ)」は、叫びを表す「感嘆詞」から生まれた。強く示したい語のしたに、強める「お」を入れていたら、いつのまにか目的を表す格助詞のような感じて固定してしまったのではないか。

【問】 ごはん、食べなさい ごはんを食べなさい

「を」は叫ぶ音が助詞となったものだが、「お」は、「偉大な」「すばらしい」「ありがたい」の「大」「御」が関係していると。「を」は、「うおー」というように、自分の内側から外に向かって発せられる音、「お」は、外側からやってくるものに対して、「美しい」「すてきだ」という思いで発せられる音である。

「は」は、古文、漢文では、存在していない。(例、子曰く)。はは、文法用語では、「係り助詞」と呼ばれる。係り助詞は、主語を強めるだけでなく、術語にも影響を与える。(例、ぼく 願ふ、ぼくは 願へ<已然形>) ぼく、願うを同時に強調

「母」の発音 (P. 117)・・・「ばば」「ふあふあ」とか、時代によって変化

「は」は、驚きや気づきを表す。(例、鳴く鹿は 今夜は 鳴かず寝ねにけらしも) 今夜は鳴かない、今夜は寝たに違いない、共に驚きを表す。

「ハ行転呼」という音韻変化。平安時代中期、恋・・・「こふい」から「こうい」、上・・・「うふえ」から「ううえ」、川・・・「かふあ」から「かうあ」に変化。同様に、係り助詞の「は」も変化、鹿は・・・「鹿ぱ」は「鹿ふあ」から「鹿うあ」、今夜は・・・「今夜ふあ」から「今夜うあ」

こんにちは、こんばんは、についても、もともとは「こんにちは、ご機嫌、麗しく存じます」など、相手の顔色や気配の良さを気遣う言葉を添えていた。昨日明日でなく、今日だという意味の、こんにちは、「ご機嫌はどうだろうか」「元気そうよかった」という驚きや気づきを表す「は」である。だから、「わ」と呼んでいるが「は」と書くのではないか。

現代日本語の発音と表記の異なる助詞には、「え」と発音する「へ」がある。この「へ」も「ふえ」、ハ行転呼して「うえ」「え」と変化したものである。「へ」は矢印そのものである。東へ西へ学校へ家へ。行く先を表す矢印。しかし「に」ほど明確ではない。東に西に学校に家には、方角や場所を明確に意識している。へは「辺」に由来する助詞なのでぼやけさせている。「沖つ波」対になる「辺つ波」。沖や奥は、遠く用意に人が立ち入ることを許さない場所を示すが、辺は、茫然と広がる果てを示す。(例、海辺、浜辺、水辺)

「四つ仮名」と呼ばれる、じ、ぢ、ず、づ。自然の大地(だいち)・・・地面(ぢめん)と書くべきだが、(じめん)としないと変換しない。橋詰(はしづめだが、はしづめと間違われる)。すなわち、ちの濁音は、じが正しいが、つの濁音はずではなくづ。うどんをすするとき、「するする」「つるつる」、「ずるずる」「づるづる」語感が変わる。四つ仮名が混同されてきたのは、1685年に京都で書かれた蜷縮涼鼓集に記されている。蜷(しじみ)と縮(ちぢみ)、涼(すずみ)と鼓(つづみ)。

「じ」と「ぢ」問題も複雑。ラヂヲがラジオに変化。ビルジングがビルディングに(独特なのは、大名古屋ビルヂング)。いちじくかいちぢく(貝原益軒)か。蛆虫はうじむしかうぢむしか、げじげじかげぢげぢか。

五十音図で最後を飾るのは「ん」。沖縄方言で、海ぶどうは「んきゃふ」、お米は「んちゅみ」。東北でそうだは「んだー」。これらの「ん」の発音は、「ng」という言語記号

で書かれる鼻濁音で、「N」とののどで切ってしまう音ではない。梅を「んめ」は「m」と発音している。そして「ん」の「n」。3種類の「ん」がある。守備範囲のひろい表音記号である。

しりとりで「ん」がくると負けるというルールがある。それは「ん」で始まる言葉が日本にはないから。